

鷗外と『高瀬舟』

——子供たちの中の森鷗外——

松原秀江

要旨

『高瀬舟』とその拠った資料との比較を通して明らかになった「居場所」のなさは、鷗外の生涯を通して云えることを、その伝記や作品、子供たちの証言を通して明らかにした。また鷗外の希望を、子供たちが継いでいることも述べた。

キーワード：鷗外、高瀬舟、峰子、エリーゼ、志げ、於菟、茉莉、キタ・セクスアリス

一

『高瀬舟』は、大正五年(一九一六)五十四歳の鷗外が、『中央公論』に発表した短篇歴史小説である。この作品が、「近世後期、京都の随筆として第一級のものの一つ」と云われる¹⁾『翁草』の中の「流人の話」に拠ったこと、本人の記した「高瀬舟縁記」で、明らかにしている。鷗外の読んだ池邊義象校訂(明治三十八年刊)²⁾の、「活字本で一ペエジ余」の部分で、ここに改めて示してみよう。次のようになっている(傍点など筆者、以下同じ)。

流人を大阪へ渡さるに、高瀬より船にて、町奉行の同心之を守護して下る事なり、凡流人は前にも記す如く、賊の類は希にして、多くは親妻子もてる平人の辜に遇るなり、罪科決して島へ遣はさる、節、牢屋敷に於て、親戚の者を出呼し引合せて、暇乞をさせらる、定法なり、故に親戚長別して奮里を出る道途なれば、己がどち、船中にて夜と俱に越方行末の事を悔て愁涙悲嘆して、かきくどくを、守護の同心終夜聞につけ、哀傷起り、心を痛ましむる事なるに、或時一人の流人、公命を承ると否、世に嬉しげに、船へ乗てもいさ、か愁へる色不見、守護の同心是を見て、卑賤の者ながらよく覺悟せりと感心して、船中にて彼者に對して稱嘆するに、彼云く常に僅の營に、渴々粥を啜りて、露命をつなぎしに、此御吟味に逢候てより、久々在牢の内、結構なる御養ひを戴き、いたづらに遊び暮し冥加なき上に、剩此度鳥目二百文を下され流人に鳥目二百銅づつて、賜事古來より定例なり、島へ遣はさる事、如何なる果報にて如此なりや、是迄二百文の錢をかため持たる事、生涯に覺は申さず、加程過分の元手有之候へば、たとへ鬼有る島なりとも、一つ身の凌ぎはいか様にも出來可申候、素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候へば、都に名残は更になく候とて、悦ぶ事限りなし、此者西陣高機の空引に傭れありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の者、³⁾同く其日を過し兼ね、貧困に迫りて、自害をしかり、死兼ねるを、此者見付て、⁴⁾ゆも助かるまじき體なれば、苦痛をさせんよりはと、手傳ひて殺しぬる其科に仍り、島へ遣はさる、なりけらし、其所行もとも悪心なく、⁵⁾下愚の者の辨へなき仕業なる事、吟味の上にて、明白なりしま、死罪一等を宥められし物なりとぞ、彼守護の同心の物語なり、

と。

この七百字にも満たない短い話を、四百字詰原稿用紙二十二枚程の短篇にするにあたって鷗外が先ずしたのは、「流人の話」にはない時代を、「いつの頃であったか」としながらも、西山拙斎（寛政四年）や伴蒿蹊（寛政三年）の序に触発されてか、

④ 多分江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃でもあっただろう。

とし、①の「流人」及び②の「同心」に、夫々小説の主人公にふさわしい具体的な名前（①には喜助、②には羽田庄兵衛）を与え、③の「兄弟の者」を、弟に限定したことである。これらの個性は、『高瀬舟』に、いかにも小説らしい実在感を与え、たとえば、

・ 智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

・ その日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽った薄い雲が、月の輪廓をかすませ、ようよう近寄って来る夏の温さが兩岸の土からも、川床の土からも、霽になって立ち昇るかと思われる夜であった。下京の町を離れて、加茂川を横ぎった頃からは、あたりがひっそりとして、只舳に割かれる水のささやきを聞くのみである。

あるいは又、末尾の、

・ 次第に更けて行く朧夜に、沈黙の二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った。

などといった具体的で美しく細やかな情景描写と相俟って、『高瀬舟』を日本文学史上欠かせない名作にしている。

しかもそれだけでない。④の部分に「白河楽翁侯」と記すのは、松平定信が、人の上に立つ為政者だっただけでなく、歌人、随筆家としても知られ、「楽翁」の外に「花月翁」「風月翁」とも号し、「幼時より学問に励み俊才の誉」高かったことに、共感してのことであったろう。又「一ペエジ余」の「流人の話」の冒頭部分四行程の文（点線①）や、末尾②の「下愚の者の辨へなき仕業」を受け、『高瀬舟』の冒頭部分に縷々記される、「所謂心得違のため」「想はぬ科を犯し」、「高瀬に乗る罪人」に対する同情極まりない憐愍の情は、長女・茉莉や次男の類など、幼く頑是ない、我が子に注ぐ鷗外の慈愛に満ちた優しさを、しみじみと思いつきこさせずにはおかない。『高瀬舟』は、鷗外の人と文学のかかわりを知る上でも、欠かせない作品の一つだと、云ってよいのではなからうか。

「高瀬舟縁起」によれば、「流人の話」を読んで鷗外が注目したのは、

一つは、「財産と云うものの観念」で、

わずか「二百文」の金を、「財産として喜んだのが面白い」ということ

今一つは、「死に掛かっていて死なれずに苦しんでいる人を、

死なせて遣ると云う事」

の二点である。二点目は一点目に比べ、「私にはそれがひどく面白い」と云うように、そのことについての鷗外の文が異常に長く、しかも、「死なれずに苦しんでいる人」を、ここでは「病人」にし、その上、『翁草』の「教のない民（下愚の者）」にも異をと見え、

縦令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かず、早く死なせて遣りたいと云う情は必ず起る。ここに麻酔薬を与えて好いか悪いかと云う疑が生ずるのである。

と述べている。これは「ユウタナジイ」即ち「安楽死」にかかわることだが、『高瀬舟』で、喜助の弟の自害の原因も、「病氣」と特定した鷗外にとって、「安楽死」にかかわることは、長男の於免⁽³⁾だけでなく、長女・茉莉⁽⁴⁾や次女の小堀杏奴⁽⁵⁾も述べているように、既に実生活で体験ずみの事だった。

明治四十一年（一九〇六）四十六歳の鷗外は、一月に弟・篤次郎を、二月に次男・不律を亡くしている。不律は前の年の八月に生まれたばかりの、志げによく似た美男の赤ん坊だった。百日咳に犯され、何度もく注射して苦しいにもかかわらず、鷗外が役所から帰って来て「顔を見ると、きつと愛想笑をする」。そんな赤ん坊が「いちらしくて、見るに堪へ」ず、心を痛めていた時、医者に、
もう止めませうか

と聞かれて、

それはもう止めた方がいい、注射したら續くことは續くけれども

と云ったというのである。この件は、一心不乱に世話をして、興奮していた志げが、

それぢや早く樂に死なせる藥を注射して下さい

と大声で叫んだことで中止になるが、同様に百日咳にかかっていた茉莉が、命も二十四時間しかない、苦しませるより、モルヒネで「樂に死なせたらどうだろう」と云われ、鷗外も志げもその気になって、もう「注射するばかり」になっていた所へやって来た大審院判事の志げの父親に、「大變なけんまくで」、

人間は天から授かつた命と云ふものがある。天命が自然に盡きる迄は例へどんな事があらうとも生かしておかなくてはならない。と激怒されて中止になっている。

のみならず、不律と同じ年の一と月前に亡くなった弟、篤次郎に注目するならどうだろう。この五歳年下の弟は、鷗外と同じ医者だが、

兄が専ら學校（というより学究肌のと云うべきか）秀才に徹してゐるとかく世間知に乏しく、寡黙であるのと對照的に、俊敏で社交的でよく世故に通じ、兄のドイツ留学中にも、東京の醫師社會や陸軍省軍醫部の人事面の情報をよく蒐集し、兄の出處進退に参考とすべき助言を送るなど、まるで兄弟の位置が逆轉した様な處世の知恵を有する人であった。

と伝えられているだけでない。

歌舞伎の世界に通曉し、劇評家としても一家をなし、雑誌「歌舞伎」の編輯と經營に才能を發揮し、兄に新作や新譯發表の自由な舞臺を提供するなど、兄の文壇的活動には不可欠の助力者であった。

と云われ、「近代的な劇評は、この竹二（篤次郎）から始まる」と評価されてもいる。そんな篤次郎と鷗外の関係は、『高瀬舟』の弟と喜助の関係、

次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるだけ二人が離れないようにいたして、一しよにいて、助け合つて働きました。

につながってゆくだろう。しかも篤次郎の死は、咽喉の腫瘍の手術の、失敗が原因の「血を壱升もは」いた空即死だった。『高瀬舟』

で喜助は、「いつものように何心なく」帰って、自ら喉笛を切つて失敗し、「死ねないで」いる「血だらけ」の弟を発見するが、鷗外も「公務出張で半月近い不在」の後、帰り着いた新橋駅で、思いも寄らず前日亡くなっていた弟の死を知らされる。大学に直行して遺体に対面し、「死因となった患部が摘出されたのを見せられた途端」、沈着で冷静な鷗外には珍しく、「失神して倒れ」かかったその傷心と狼狽ぶりは、弟の姿を見て訳がわからず、頭の中では、「なんだか」「車の輪のような物がぐるぐる廻っているような」状態で、弟の望みに通りに

しかたがない(『峰子日記』には、「残念に思へども仕方無し」とある)

と、「剃刀」を「抜いて」やった喜助の姿に重なるだろう。近所の婆さんに発見された時、喜助は茫然自失の状態で、苦しむ弟を見かねて、

手早く抜こう、真直に抜こう

と「用心」しながら、「抜いた時の手応は」、「どうも」「今まで切れていなかった所を切ったように思われ」ただけだった。しかもその上喜助が、

待っていてくれ、お医者を呼んで来るから

と云った時、「怨めしそうな目附」で、

医者がなんになる

と云い返す弟の言葉は、そのまま心の奥深く沈んでいた鷗外の想いだったらどうだろう。肺結核と萎縮腎に侵されながら、医者にも診せず、志げに泣かれ、「涙で眼が腫れふさが」る程、「長い間泣き続け」られて「やっと」、

これは小生の小水には御座無く、妻の涙に御座候

と書いた手紙をそえ、⁽⁵⁾気安めの為尿検査をした時は、既にもう「完全に手遅れ」だった。それは「本人がよく承知してゐた」⁽⁷⁾ことで、その半年後鷗外は亡くなっている。

改めて云うまでもなく鷗外は、文久二年（一八六二）津和野藩主・亀井茲監（これみ）の典医、森静泰（維新後静男）の長男として生まれた。静泰は祖父・白仙の婿養子、母の峰子は白仙の一人娘だが、慶安年間（一六〇〇年代）から続いた森家十二世の白仙も、「佐佐田氏から入つて」、「九世秀菴の子供たちが早死したり、山口に逐電したりして断絶しそうになった」「森家の名を再興した」人である。⁽⁸⁾ 自伝的要素の多い鷗外の『本家分家』には、吉川博士(9)の家のこととして、

祖父は格の低い奥勤になった。此人には儒者として門戸を張って行けるだけの学力があつたが、生涯微禄を食んでいた。⁽¹⁰⁾

と記し、そこに「よめに来たのは」、「帯刀御免」の「豪農」の「娘で其腹に博士の母は出来た」と述べ、又よく指摘されることだが、博士の家には、博士の祖父から博士の母を通じて、一種の氣位の高い、冷眼に世間を視る風と、平素力を養つて置いて、折もあつたら立身出世しようという志とが伝わっていた。

と記している。のみならず、このことと関連して、次のように云われていること、即ち、

十四世の役割を生きる鷗外森林太郎が出世してくるのは、このような状況においてであつた。「神棚に燈明かがやき、祖母君涙さへ落して喜び給ふ」（「不忘記」という形容は、いささか大時代的であるが、この後に続く「いかでか此ちご、よく生おぶしたてと誰も誰も思ふ」という表現と共に、単なる誇張でないものが籠められているはずだ。一家系の積年の「風」と「志」とは、ここでそれを課するに足る貴種をさすけられたのであつた。

と云われていることを見るなら、『高瀬舟』の中で喜助が先ず云っていること、
わたくしはこれまで、どこと云つて自分のいて好い所と云うものがございませんでした。

即ち「自分には居場所がなかった」ということは、『翁草』にも「高瀬舟縁起」にもなく、『高瀬舟』にだけ見られることであるだけに、見逃す訳にはいかなないように思われてくる。鷗外にとって、小説は何を書いてもよいものだったが、それであるなら尚更のこと、意識

的に加えたか、あるいは又、自分だけの孤独な執筆という作業の中で、幼い頃から無意識の心の深層に深く押し込めていたはずのことが、ふと翼を得て舞い上がってしまったのか、鷗外の人と文学を考える上で、この部分は見すごす訳にはいかないように思われる。

鷗外の伝記を、今少し詳しく見てゆこう。十二代目藩主、茲監の大改革による「藩の文教水準の高さや好学の気分」に包まれて幼い頃から鷗外は、論語(六歳) 数え年、以下同じ 慶応二年)や孟子(七歳 明治元年)の素読を受け、藩校・養老館では四書(八歳) 五経(九歳)を学び、十歳の頃には史書にも親しみ、しかも九歳(明治三年)の十一月には、父・静男についてオランダ文典、即ちオランダ語を習い始めている。典医の静男(静泰)は藩主の意向で、「當時最高の俊秀」だった洋方医について洋医学(蘭方)を修めた医者だった。⁽⁷⁾「神童のほまれ高い森家の長男」鷗外は、廃藩置県(明治四年七月)後、茲監の侍医になっていたその父と共に、身分に束縛された江戸時代と違い、『学問のすすめ』(明治五年〜九年)に象徴的な自由な御世の立身出世を夢みて、明治五年十一歳で、旧藩主に従い上京、その下家敷に住み、ドイツ語学習の為(オランダ医学の名家は、東大医学部を始め、日本の医学界が範を求め、展開しようとしていたドイツ医学⁽⁷⁾) 母・峰子の従兄、西周邸に寄遇する。そして鷗外十三歳、年譜の明治七年(一八七四)には、次のようにある。即ち、

一月、下谷和泉橋の東京医学校予科に入学。規定年齢に満たないため、二歳増して、万延元年(一八六〇)生まれとして願書を提出し、以後公的にはこの年齢を用いた。

と。十三歳は人間にとって、子供から大人になる最も大事な時期である。この時点をうまく飛び越え通過することができず、人生を誤る、台無しにする人間(子供たち)の話や言辞は、名作と云われ、ベストセラーやロングセラーになって、時や所を超え、親しまれ続けてきた日本の古典に、しばしば語られ記されている。⁽¹³⁾「二歳増し」は、「十四歳以上十七歳以下」という年齢制限をクリアし、その結果「経済的に窮地に追い込まれていた」森家にとって、「教科書は学校のものを使うことが出来」、「月謝も貧窮の度合に応じて減免になる。ゆくゆくは給費を受けることも期待できる」⁽¹¹⁾からだったろう。だが潤三郎が云うように、

首尾よく入学することができた。⁽¹⁴⁾

ですんだのだろうか。親たちが思った程、軽いことだったろうか。あるいは又私たちが考えるように、名誉なことだったのだろうか。危うい大事な時期の子供の心に、闇をつくらずにすんだらうか。

たとえば少しもどつて、『キタ・セクスアリス』（明治四十二年）の「十一」になつた」の項をみてみよう。そこには、
僕はほんやりしているかと思ふと、餘り無邪氣でない處のある子であつた。

とある。「ほんやり」は、鷗外流に云えば、「綺麗さっぱり整理」されていて、「氣の利いた」「小才」に対する言葉で、「どんな新思想が出て驚かない」「あらゆる物」を持った「混沌」とした状態を云う。その典型として西周をあげ、

頗るほんやりした人でありました。そのほんやりとした棕鳥のような所にあの人の偉大な所があつた。

と述べている（混沌）。つまり二人には共に、世の中が激しく変わる時代に欠かせない「偉大」な素質があり、それ故にこそ峰子の従兄の西は、預つた同じ田舎者（津和野出身）の「林太郎を貴重に思い、大事に育て」たのだろう。だが、若君のように大切にされた母のもとを初めて離れ、見ず知らずの「東京へ出てきた十歳（数え年十一歳）の少年にとつて、西家の生活は厳しい試練で」、その「手加減しないオランダ仕込みの規律に少年の脆い心は傷つ」いた。そして、十四・五歳の時には「癩癩持ちの少年」になつていたと、指摘されている。茉莉が、

父は普通、人がどうでもいいと思うような小さな事に、深く腹を立てる人であつた。

と伝えるのも、この延長線上のことだつたらうか。

『キタ・セクスアリス』の「十三」になつた」の項を見てみよう。十三歳は女子であれば女になる時期、結婚し、子供もできる時期だが、次のように記している。

自分の醜男子なることを知つて（後述）、所詮女には好かれなだらうと思つた。此頃から後は、此考が永遠に僕の意識に潜伏してゐて、僕に十分の得意といふことを感じさせない。そこへ年齢の不足といふことが加勢して、何事をするにも、友達に暴力で壓せられるので、僕は陽に屈服して陰に反抗するといふ態度になつた。（中略）僕は先天的失戀者で、そして境遇上の弱者であつたと。

年齢が高くなればなる程、どれもく晴れくくとならないように見える鷗外の写真の表情は、何を語っているのだろう。西欧とほとんど同じ時期に起こつた博物学が、日本では自然科学にならなかつたという現実もある。

明治十四年(一八八二)七月、鷗外は二十歳(満年齢で十九歳)の「最年少」で、東大医学部(東京医学校を、明治十年に改称、その本科生になつていた)を卒業する。だが、本人の自負や周囲の目にも反して、二十八人中八番の成績で、熱烈に渴望していたにもかかわらず、文部省派遣留学生(三人まで)にはなれなかった。肋膜炎にかかったこと、「試験中の下宿の火事によるノート焼失、外科学担当シ、ユルツェ教授に睨まれた」ことが、原因だったと云われるが、傍点部分の軍医の性格の「偏狭で獨善的な一面」は、その前任者・ミュラーの「恐るべき自信」と同様のものらしく、

それは即ち當時の西歐文明、殊にその自然科学の性格そのものに由来する、學問世界の表情といつたものではなかつたか

と云われている。⁽⁷⁾「面と向つて接する側」には、「傲慢」とも見えるその「自信」と「表出」に、津和野という田舎の武士の出で、若く幼く、「神童」ともてはやされてきた誇り高い長男の鷗外が、森家に大量に伝わる祖父・白仙の細かい書込みのある漢方医書などで、懸命に学んだ「二千年來」の東洋医学の立場から批判的になり、⁽¹¹⁾しかも「陰に反抗する」性癖を身につけてしまった「餘り無邪氣でない」鷗外が、「苟くも意を邀へ其氣を買ふことを欲せず、専ら其術を活用せんことを欲して」睨まれてしまったとして、不思議ではない。留学を「是非、ナク、思ヒ止リ」(賀古鶴所宛明治十四年十一月二〇日付書簡)、「老父への勞り」などからも、地方へ下らず、謂わば「浪人状態」にいた鷗外は、同期の七歳も年上の小池正直の「義侠心」による、名文とも傑作とも云われる漢文の石黒忠憲宛推薦状で、「一つの便法」として、陸軍に入ることになる。この〇印の部分は、たとえそこに生涯の親友、賀古鶴所も既に就職していたとしても、十二分に注意しておいてよいのではなからうか。

もつとも陸軍入りは、中井義幸の研究によれば、留学を断念した鷗外が、「確実な出世の道に繋がること」を望んだ森一家の願いでもあり、彼の書いた履歴書は、「西の手を経て林軍医総監に渡され」、林自ら陸軍省総務に提出している。西にとつて鷗外の陸軍入りは、ドイツ語を学ばせた時からの「既定方針」だった。林軍医総監即ち林紀は、西のお膳立てで後に鷗外の最初の妻になる赤松登志子の叔父、その紀の弟・紳六郎は、西の養子になつている。軍医部は彼ら順天堂一族のいわば「完全な支配下」にあり、鷗外(林太郎)は「林の跡目を継ぐ軍医総監」になるべく、遅れて陸軍入りしたにもかかわらず、独り抜擢されて「軍医本部付」になり、「日本陸軍の軍医組織を設計する極めて重要な任務」を与えられ、東京でのドイツ語文献調査の後には、現地での実施調査が予定されていた。於菟が云

うように、鷗外に「政治の方に向う野心」があつたのならば、国家の建設にかかわるこの仕事は、鷗外のその望みを、遠く離れるものでもなかつたらう。林がパリで客死するなどということがなければ、新軍医総監になった橋本綱常とライバル関係にあつた石黒のもとで、陸軍の「脚気のエース」となるべく、ドイツで不本意な食品衛生学を専門に学ばされることもなかつたに違いない。

だが、妹・喜美子の夫・小金井良精²⁰、文部省派遣留学の後、「お雇い外国人教師」に代り、「母校の教授」になることが、鷗外にとつて、最も幸せな道だつたらうか。『キタ・セクスアリス』によれば幼い頃から「まだ知らない」ことを「知るのが面白かつた」鷗外は、大学時代も何かに「なる爲めに學問をする」のではなく、ひたすら「物を知る爲め」、「學問をする爲めに學問」をし、講義で聞いた「術語」も、その日の内に「語源」を調べて、根本から理解しておくという徹底ぶりだつた。とすれば明治十七年（一八八四）六月、待望のドイツ留学を命じられ、八月横浜出港のフランス船に同乗した留学生の面々、多くは医学だが、物理学や法制史、音楽理論にまで至る各分野で、「近代日本の學術開發の任務をになう知的御曹子」とでも云うべき面々の顔ぶれを見れば、軍医ではあつても、鷗外の洋行による「本源探究」の目的は、達せられたかに見える。鷗外もそう思ったに違いない。

だが、同じ漢文体日記でも、西へ向かう初々しい『航西日記』の「饒舌で氣負つた記録に比べ、『還東日乗』と名づけられた帰路の記録は、無愛想でいかにも簡略」、「陰鬱なトーンが全体を蔽っている」とさえ云われ、帰国船中の漢詩には、

いかにも不満足な感情を表出し、みずからを「狂客」に見立てているとまで云われている。⁸

にもかかわらず「昼間は大学衛生部」で「衛生学の基礎」を学び、夜は下宿で、「天下の書を読み尽くそう」と、「懸命に」努力した¹¹鷗外は、どんな「在來の權威」にも「畏れ憚ること」のない、西洋本来の「自由な學問的批判」精神を身につけて、帰つて来る。欧米型の近代国家の建設に、「國家を擧げて邁進し」、「歐米の學藝に學ぶ個人の能力の伸張がそのまま國家」の「有用性につながる」という、選ばれた少数者にとって、「幸福な公私關係の調和」の成立している明治前期の日本に。まるでそれまで花の象徴だつた桜にとつて替つた「薔薇」のその「棘」のように。⁷とすればその当然の結果として、帰国後の鷗外に、喜助の云う「自分のいて好い所」、居場所がなかつたとしても、何ら不思議ではないだろう。ほとんど決まっていた登志子との結婚は、於菟が誕生したにもかかわらず、離婚になり、医

学界や医学ジャーナリズムの世界で展開した戦鬪的啓蒙的な文筆活動は、不興を買い叱責されて、鷗外自身「隠流（かくれながし）の号を用いた¹⁹⁾」と云われる。小倉行が決まると、まるで「内部から開花する」ように、全身を「投じてゆける対象」を求めて、新機運の起りつつあった日本の明治二十年代初頭の文学界で、行っていた「評論や翻訳活動」も影をひそめ、「東京に転任するまで足かけ四年の間」、「沈黙」を守る¹⁹⁾ことになってしまう。

だが、明治二十二年八月、『国民之友』の夏期附録として発表した訳詩集『於母影』の、

西洋の近代詩のおもかげを芸術的香気の高い典雅な日本語で表出するところみは、時代の若い人々に強烈な影響を与え

その稿料を元手に、『¹⁹⁾文学しがらみ草紙』の創刊へとき進んでいたことを見れば、東西の医学を懸命に学びながら、東京では「貸本屋の常得意」（キタ・セクスアリス）になる程、馬琴や京伝は勿論、春本めいた春水や中国小説、徂徠や柳北などまで読み耽り、妹の喜美子には、『源氏物語』など平安朝物語文学を奨め、その『源氏物語』五十四帖の和歌を漢詩にしたり、浄瑠璃本『朝顔日記』の漢訳を試みたり²¹⁾、ドイツ留学中には又、ドイツ文学やドイツ語訳の西洋文学を自室で「片端から」読み、

架上の洋書は已に百七十餘巻の多きに至る。

と日記（『独逸日記』明治十八年八月十三日）に記す鷗外にとって、読書も含む文学（後述）活動こそ、喜助の云う「自分のいて好い所」、心やすく伸々と居られる場所、時間帯だったろうか。

四

だが、それも簡単ではなかったようだ。明治三十五年、小倉から帰京し、日露戦争も終って、明治四十二年（一九〇九）一月創刊の『昂』は、『明星』廃刊の後を継ぐ形で刊行され、以後鷗外の主要発表紙になってゆく。だが、三月発表の鷗外最初の口語体小説・『半日』は、妻・志げの反対で単行本化できず、七月に発表の『キタ・セクスアリス』の為に、この号は発売禁止になり、鷗外は陸軍次官・石本新六に「戒飭²²⁾」されている。

この石本新六に先ず注目してみよう。明治四十三年三月四日の日記に、

中耳炎増悪し、神經過敏になりためめにや、石本中將新六と衝突す。幸に事なきことを得て退出す。

と記される人物である。同じ年の九月から、軍医部の人事権問題で、鷗外はこの石本と対立し、翌年三月辞職願いを出し、十月にも又次の年の七月にも辞表を提出、山県有朋の介入で事なきを得ている。前年陸軍大臣になった石本が、この年(明治四十五年)結核で亡くなり、その後を引き継いだ者たちの、いわば無知による横暴にも嫌気がさして、七月の辞表提出になったか、と云われている。のみならず、同じ年の七月(二十九日)明治天皇が亡くなり、十月乃木希典夫妻が殉死する。「轎車にしたがって青山葬場殿に行き、帰途、その情報に接したとき」、鷗外は「半ば信じ、半ば疑った」。

両者が相識したのは、明治二十年(一八八七)四月、留学生の鷗外(二十六歳)が、ベルリン滞在中の乃木(中将)を、表敬訪問した折のことである。「長身巨頭沈黙厳格の人なり」というのが、鷗外の第一印象だが、多年にわたる親交のあった両者には、

プロイセン陸軍の剛直の風紀に共鳴した體驗を共有するといふ同心意識が相互にあつたかもしれない。

と云われている。明治三十二年(一八九九)、退官まで考えて思い直し、小倉勤務に旅立つ鷗外を、一人新橋駅に見送り、東京に帰ってからも、長男の読書(ドイツ語の小説など)だけでなく、外国語に関する相談や、旅順攻略後俄かに増えた、乃木への西欧各地からの表敬の書の、手助けもしている。そんな乃木に突然死なれて、「半信半疑」だった鷗外は、雑誌『中央公論』に、この事件に関する見解・所感を求められ、

總て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし、

との考えから、『興津弥五右衛門の遺書』(これも『翁草』によっている)を書いて送っている。

だがそれだけだったろうか。というのも、この「希代の名木」を主題に、細川忠興の恩に殉じた『興津弥五右衛門の遺書』以後、鷗外は、現代小説から歴史小説に転換しているからである。乃木殉死の衝撃は、鷗外に公務(陸軍)から身を引くこと、またそれ以上のこと、即ち医務局長に就任(明治四十年)した頃から、結核再発の不安を抱えていたにもかかわらず、医者にも診せず、『妄想』(明治四十四年三月〜四月『三田文学』に発表)に既に記していたように、「死を怖れず、死にあこがれず」、武士らしく自然に死ぬことを、密か

にだが確實に、決意させたのではなからうか。何故なら、

乃木が旅順攻圍戦で生じた第三軍の甚大な死傷に眞實心を傷め、戦後の遺族達への慰撫と戦傷者の生活支援に肝膽を砕いたこと、明治天皇への殉死の動機の一部に、自分の指揮下にあつて斃れた英靈達への謝咎の心があつた

と推測されること、そしてその乃木に、「研究者」としての「学識」を深く信頼されていた鷗外が、「實驗實證を至上とするドイツの學風」への「深い信奉」から、海軍のイギリス流の經驗尊重の脚氣榮養障害説を取らず、既に明治二十年（一八八七）、麦飯給食で予防できると報告されていたにもかかわらず、慎重を期した結果、陸軍の伝染病説に荷担し、悲劇的な失敗を犯してしまい、「國家財政の冗費より何より、何萬といふ」「兵士の貴重な一命と健康の無残な消耗を防げなかった、その「國家的損害の責任の一半」が鷗外にもあると、指摘されているからである。大正四年（一九一五）十一月八日、大正天皇即位式列席の為、雨の中鷗外は京都に赴き、日乗上人や山崎暗齋、荷田在滿の墓に詣で、病に伏す岡陸軍大臣を祇園の中村楼に見舞い（十七日）、第一日目、第二日目の「大饗」に出席して、東京に帰った四日目、次官大嶋健一に引退の旨を伝え、親友の賀古鶴所に書簡で、辞意を告げたことを知らせている。そして『中央公論』に一月『高瀬舟』を発表した大正五年（一九一六）四月十三日、陸軍省医務局を辞職し、三十五年に及ぶ軍医生活を終えている。

にもかかわらずその鷗外が、石黒忠憲（男爵）に「直立不動」の「いじらしいまでの低姿勢」で、内々知らされていた「上院占席」の件で書簡を送り、「最大の期待」を示しているのは何故だろう。『高瀬舟』を書き終えた大正四年十二月五日の、翌日のことである。

「上院」は「貴族院」のこと、「占席」とは議員になること。⁽²²⁾

先任者の小池とは違い、「華族」になれなかつた鷗外自らが、「退職を間近に掬え」、この「栄典」を「欲したのは当然のこと」だったのだからか。そしてそれは、「決して榮光の場に恬淡として無視して生きることが出来る鷗外ではないこと」を、示しているのだらうか。『高瀬舟』で「わが身の上に引き比べ」、喜助に「慾のないこと、足ることを知っていること」を、「不思議」に思っている同心・庄兵衛のように。

だが、明治四十二年（一九〇九）発表の『予が立場』には、次のように記されている。

・私は田山君のように旨くないと云われても、實際どうでもない。田山君も正宗君も、島崎君も私より旨くて、一向差支がない（中略）

私の方が旨くても困りはしません。併しまずくても構いません。ちつとも不平がない。

・諸君と私と一緒に集めて、小学校のクラスの席順のように並ばせて、私に下座にすわってお辞儀をしろと云うことなら、私は平気でお辞儀をするでしょう。そしてそれは批評家の嫌う石田少介流とかの、何でもじいっと堪えているなんぞと云うのではありません。本当に平気なのです。

・私の考では私は私で、自分の気に入った事を自分の勝手にしているのです。それで気が済んでいるのです。人の上座に据えられ、たつて困りもしないが、下座に据えられたつて困りもしません。

などと。これは、幼い頃から「小説」が好きで、「新聞や雑誌」でも、手当たり次第読んでいた（『キタ・セクスアリス』にもかかわらず、初めからその「覚悟」がなく、所詮自分はディレクターでしかない、と思っている鷗外の「文士」や「芸術家」（『なかじきり』大正6・9）向けの言葉ではないだろう。『サフラン』（大正3・3）でも次のように云っている。

宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしていた。私は私の生存をしていた。これからも、サフランはサフラン（中略）私。私の生存をして行くであろう。

と。

ここで、鷗外が陸軍省医務局長を辞職する同じ年（大正五年）の三月二十七日、母・峰子が七十歳で亡くなっていることに、注目してみよう。鷗外はこの峰子の為にこそ、貴族院議員を望んだのではなかったろうか。『峰子日記』²³の明治四十年（一九〇七）十一月七日の頃に、

師団に行く（く）。一昨日、演習行（き）見合（すこと）申付らるゝ。総監に成（る）こと近き内ならんか。

と記し、同じ月の十四日の頃には、

朝の新聞に、軍医総監に成（り）たる由見ゆ。人々悦（び）に来る。電報數十来る。

と記す峰子こそ、その「悦び」の輪の中心に居たに違いない。

峰子は、父・玄仙（白仙とも）に女に、「学問はいらぬ」と云われて育ち、鷗外が生まれると母、清子の手ほどきを受け、皆が寝しずまっ

てから、こつそり夜遅くまで学び、幼い鷗外の学業を助けたと云われている⁽¹⁹⁾。子供たちの教育に、鷗外が男女の差をつけず、退職後体調不良の中でも、手紙や手作りの教科書で、熱意を傾けるのも、そんな峰子のもとで育ったからだったろう。

ドイツ留学後、鷗外は来日までしていた、

永遠の恋人ではなかったか⁽¹⁹⁾

と云われるエリーゼを諦め、自らの弱さにもんもんとする中、海軍中將・赤松則良の長女・登志子と婚約・結婚するが、親たちと別居した赤松家の持家で、まだ「我儘」の抜けきらない登志子(十七才)に腹を立て、ある日突然かわいがっていた潤三郎と家を出、篤次郎と兄弟三人で借家に入ってしまう。立身出世の為には、願ってもない縁談だったにもかかわらず、そもそも結婚後二、三時間しか眠らず、友人との議論や執筆に熱中し、「自らを追い込」むような「異様な」生活を見て、森家特に峰子は、鷗外と「二体」になって、離婚を進めてゆく⁽²⁴⁾。「閨閥の比護を諦め」、結局、鷗外を思う「一念」で、出世より「健康」を選んだのだ⁽¹⁹⁾。長男の於菟が、そんな峰子に溺愛される理由を、鷗外は勿論知っていただろう。峰子は於菟に次のように云っている。

あの時私達は気強く女を帰らせお前の母を娶らせたが父の氣に入らず離縁になった。お前を母のない子にした責任は私にある⁽¹⁹⁾と。

既に見たように、「玄仙の再生」と云われ、「一家を興すすべての望み」をかけて、峰子はその「出世を一途に望んだ」鷗外が、陸軍軍医総監となり、小池退官のあとを受け、陸軍省医務局長になり、「軍医としての最高地位」に上った「悦び」も束の間、その翌年(明治四十一年)峰子は、最愛の息子・篤次郎(二月)と可愛い孫の不律(二月)を喪くしている。同じ悲しみの中にいた鷗外は、峰子に於菟を伴い、彼女の「両親の眠る土山への墓参りと好きな京都での静養」をすすめたらしい⁽²²⁾。その京都から奈良に向かい、東京に帰る途中、峰子は赤松邸に立ち寄っている。鷗外が「一方的に離婚したことをよく承知している」峰子にとって、登志子が亡くなって六年にもなる「その嫁の実家に赴くこと」は、「辛いこと」だったに違いない。にもかかわらず峰子は、第一高等学校の制服を着るまでに、立派に自分が育て上げた於菟を、「唯一の力草」にして、お詫びと報告の為、「当時貴族院議員」だった赤松(男爵)邸を訪れ、感動的な対面を果たすのである。

かねてから林太郎が成人しました於菟を、一度お邸にと申しますのでつれてあがりましたが、よく会ってやって下さいました。と峰子は云うが、

自体この訪問については祖母が前から父に云ってあったらしいと、於菟は記している。⁽¹⁹⁾

しかもそれだけではない。女嫌いになって、「長く独身をつづけ」る鷗外の身を案じ、隠し妻の世話までした峰子は、「相当の良家の教養のある令嬢の中で美しい人を懸念にたずね」

世の中にはこの様な美しき人もあるものか

と、「不思議に思われ」る程の「眼のさめるような美人」で、大審院判事荒木博臣の長女・志げを、「説き伏せて」まで鷗外に娶せている。志げも再婚だが、まるで「初恋」のように、「全身全霊」で鷗外を愛したと云われる志げとの小倉での新婚生活は、「非常に幸福」だったらしい。そのことに偽りはないだろう。

だが東京に還り峰子との同居が始まると、志げはその「愛を独占しよう」として、峰子と鷗外の親密さに「嫉妬」し、家計に関する「主婦」の座も、「繰返し」問題になって、やがて鷗外は、「家の中でも観潮楼の正門のある古い広い建物（それは峰子が鷗外の為に、心を尽して造り上げたものだった）」に峰子を置き、自分は「廊下で連っている裏手の小さい方の家に」、志げと共に住むことになる。のみならず、明治三十七年（一九〇四）日露戦争で鷗外が出征すると、志げは娘をつれて、実家・荒木家の借家に移ってしまう。そして、明治三十九年一月、日露戦争凱戦のその日、峰子や於菟を始め、親戚や友人・文士仲間等が賑やかに集う観潮楼に、志げや茉莉の姿はなく、客もいなくなった午後十一時過ぎ、峰子の勧めで、鷗外は夜道を「一人歩いて」、妻や娘に会いに行く。⁽⁷⁾この直前の文の傍点部分は、志げサイドの文献にはないが、戦地からの於菟宛書簡（明治三十八年九月二十三日付）に、『うた日記』に載る鷗外の次の歌、

二人子の すむ二家の いづれにか いなんと夢に まよひけるかな

の一首のあることを思えば、峰子もこの歌を知り、傍点部分の通りだったろうか。「父の姿を思うと氣の毒でたまらない」と、杏奴は記すが、どちらにせよ、賑やかな宴のあと、最愛の息子にいわば置き去りにされた峰子の心の内を、夜道を独り、二時間もかけコツ／＼

靴音を響かせて歩く鷗外も、知っていただろう。この別居はそれから「半年余り」続き、峰子や弟の潤三郎・於菟とともに、鷗外は「観潮楼に住み、多くは土曜から日曜へかけてだけ妻と娘の住む芝区明舟町の家に行った」と、於菟は記している。そして彼も又、

あたかも妾宅を訪れるごとく来る父を、幼い妹が不審がって「パッパ（父の事）のお役所は長いのねえ」といった。

と「父から」聞いて、「当時の心ない私もものあわれを感じた」と述べている。のみならず「周期的に感情がたかぶり」、「同じ事をくり返して父を悩ます理屈と同時に烈しく涙を流す」志げを見て、

小さい妹が「お母ちゃんがあんなに泣くからパッパがまんして。」という。「実におれは茉莉が可哀そうで。」と父が祖母にいうのを私はきいた。

とも。こんなごたごたがなければ、篤次郎も、鷗外と志げの仲人だった東大教授の、

岡田の治療で死ぬのはいや

と拒絶して、於菟が「大好き」だっただけでなく、峰子も鷗外とは「またちがった意味で信頼しかつ力にした」篤次郎⁽¹⁹⁾を、喪くすこともなかったらう。

峰子が胃瘵の症状を見せ、以後比較的安定していたにもかかわらず、「心身の衰えが目立」つと、鷗外は古稀の祝いに増築中の部屋に、その病床を移し、亡くなると戒名も自ら考え、遺灰は遺言通りに、峰子の母・清子も眠る父・白仙の墓のある土山の臨濟宗常明寺に運んでいる。土山は、参勤交代に出た白仙（玄仙）が、藩主にも遅れたその帰路、脚気衝心の為客死した所である。妹の喜美子が「大事な大事なお兄様」と云っているように、「玄仙の再生」として、峰子にその生涯をかけて、大切に育てられた鷗外が、軍医も終りにして「私は私」の生き方をしようと心密かに決めた時、「上院占席（貴族院議員）の件」が舞い込み、それを母・峰子の為に渴望したとして、何ら不思議ではないだろう。そもそも、峰子が胃瘵の症状を見せたのは、昭和四十三年七月、この年の三月に鷗外は石本陸軍次官と衝突している。又峰子の心身の衰えが目立ち始める大正四年は、十一月十日に大正天皇が即位、二十八日に鷗外は大嶋次官に辞意を告げている。そして峰子の亡くなるのは大正五年三月二十八日、同じ年の四月十三日に鷗外は辞職し、軍医生活は終わるのである。貴族院議員と云えば、峰子が「母のない子」として、「襤褸の頃」から憐れんで、死後も守りぬこうと夢に出てくる程、「盲愛」「溺

「愛」した於菟の祖父（登志子の父）、赤松則良に同じである。結局鷗外は貴族院議員には、なれなかったのだが。

五

だがそれにしても峰子は何故、鷗外の「最初の不縁」の主な原因を、「その妻の醜い所」にあると信じてしまったのだろうか。「美しいというのは大切な事」に違いない。だが果して、登志子の「器量」がもっと「よかつたら」、鷗外も「きらわなかった」のだろうか。鷗外が親友の賀古鶴所に、小倉から書き送った手紙（明治三十五・二・八）の次の一節、

好イ年ヲシテ少々美術品ヲシキ妻ヲ相迎ヘ大ニ心配候處萬事存外都合宜シク御安心被下度候

の傍点部分は、鶴所の冷かしに対するものだったとしても、鷗外と峰子の思いが、必ずしも同じではないことを語っている。又、人の性質など急にはわからないが、美しいのはひとめでわかる。

とは、何と皮相な考え方だろう。

於菟によれば、¹⁹鷗外と登志子の離婚の原因は、次の三点に要約されると云ってよいだろうか。

イ. 登志子はまだ十七歳で、我儘が抜け切らず、気むずかしく書斎にばかりこもる鷗外の機嫌をとりそこねた。

ロ. 結婚後鷗外が借りた赤松家の持家に、富志子の妹も同居し、利かぬ気の鷗外は、赤松家に養子扱いされていると思った。特に弟、た、ち、の、扱、い、に、腹、を、立、て、た。

三番目の理由については、於菟の文をそのまま記してみよう。次のようにある。即ち、

ハ. その頃父の月給は百円で、家族や出入りの客の多い故もあろうが毎月家計に不足するという事が、これまでつましく暮し、当時の事で百円は大金と思う祖母などに「華族の御姫様には困る」と思わせた。また何かにつけて里方の権門の噂をして、事ごとに「榎本（前名釜次郎、当時武揚、海軍中将子爵、後に文相）の叔父が……」などというのがひどく父の疝に障ったとの事である。

と。この部分は、『高瀬舟』で同心・庄兵衛が、「遠島を仰せ附けられ」、「二百文の鳥目」で満足している「慾のない」喜助に比べ、「足

ること」を知らない我が身を省みる部分に、重なるだろう。少し長いが、これもハに対応する部分を、そのまま記してみよう。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になっていて、もう女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きているので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云われる程の、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために著るものの外寝巻しか拵えぬ位にしている。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎えた。そこで女房は夫の貰う扶持米で暮しを立てて行くこととする善意はあるが、裕な家に可哀がられて育った癖があるので、夫が満足する程手元を引き締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば月末になって勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持って来て帳尻を合わせる。それは夫が借財と云うものを毛虫のように嫌うからである。そう云う事は所詮夫に知れずにはいない。庄兵衛は五節句だと云っては、里方から物を貰い、子供の七五三の祝だと云っては、里方から子供に衣類を貰うのさえ、心苦しく思っているのだから、暮しの穴を填めて貰ったのに気が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るような事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、これが原因である。

どこの家にもあるごたごたのように見えて、傍点部分をや、変えれば、登志子だけでなく、実家の持家に別居も辞さない「我がまま勝手な」志げとの体験も、込められているだろうか。

もつとも登志子との離婚は、口の傍点部分が、直接の引き金になったことは既に見た。のみならずイがエリ、エリ、エリ、事件にからみ、鷗外が健康までそこねると、親戚の西周などの不興も顧ず、峰子が登志子との離婚を「成りゆきに任せる」というよりも、先導したらしいことも。当時次男以下の男子は、養子になるか奉公に出るか、家に残れば下男並の扱いを受けても当然だったにもかかわらず。

峰子の趣味が、「読書と観劇」だったことにも注目してみよう。於菟は次のように述べている。

年とつて眼が衰えてからは、よく私に雑誌、新聞や新刊書の小説をよませてきた。それもあまり通俗のものには好まず、比較的高級のもの、を好んだ。『吾輩は猫である』を初め夏目漱石の初期の諸作や島崎藤村の『破戒』など、私の朗読して祖母に喜ばれたものである。翻訳文芸をも理解して父や坪内逍遙、二葉亭四迷のものはほとんど全部よまされた。そしてむずかしいところは腑に落ちるまで質問するので私は弱らせられた。

と。¹⁹鷗外が、「年老い目力衰へて」も、「毎に予の著作を読む」この母の為に、『即興詩人』の活字を大きくしていた(即興詩人 HANS

CHRISTIAN ANDERSEN 初版例言) ことは、よく知られている。そんな峰子が、『舞姫』は読まなかったのだろうか。

既に見たように於菟は、エリーゼを鷗外の「永遠の恋人ではなかったか」と記している。また大正十一年(一九九二、この七月に鷗外は死去)、結婚し子供もできてから留学する於菟に、

お前のようになつてから行くのでは面白い事もないなあ

と微笑み、「昔の夢の影がちらと蘇つた」⁽¹⁹⁾ように見えたとも。於菟だけでない、茉莉も又「幼い日々」⁽¹⁷⁾の中で、

——インソルデよ、我が恋人よ、ふたたび我がものとなり給うとか……

と歌う鷗外の、「低い、唄れたような歌の節が、庭の間に漂うようにして消えた」と、記している。『甘い蜜の部屋』で、林作(鷗外がモデル)に「独逸人の女」(愛人)がいるのも、幼い頃の茉莉のこんな記憶に、つながるのだろうか。日露戦争従軍詩集としての『うた日記』に、よく知られる「扣鈕」⁽¹⁸⁾と題した一節がある。

南山の たたかひの日に

袖口の こがねのぼたん

ひとつおとしつ

その扣鈕惜し

べるりんの 都大路の

ばつさあじゆ 電燈あをき

店にて買ひぬ

はたとせまへに

えほれつと かがやきし友
こがね髪 ゆらぎし少女
はや老いにけん
死にもやしけん

はたとせの 身のうきしづみ
よるこびも かなしびも知る
袖のぼたんよ
かたはとなりぬ

ますらをの 玉と碎けし
ももちたり それも惜しけど
こも惜し、扣鈕
身に添ふ、扣鈕

鷗外の次女・杏奴は「母から聞いた話」⁽⁵⁾の中で、ここに詠われている「こがね髪 ゆらぎし少女」は、父の初期の作「舞姫」にも出て来る獨逸留學時代の戀人ではないかと述べ、その上更に、

此の女とは其後長い間文通だけは絶えずにゐて、父は女の寫真と手紙を全部一纏にして死ぬ前自分の眼前で母に焼却させたと言ふ。

と記している。これ程の鷗外の「身に添ふ」想いを、親兄弟が知らなかった、あるいは黙殺したのは何故だろう。

先ず峰子が、登志子の「器量」がもつと「よかつたら」と考えた理由から見てゆこう。於菟はそれを、二男・篤次郎の嫁・久子に求めている。久子は元判事長谷文の長女だった。「観劇」が趣味の峰子にはもってこいの、

先代中村歌右衛門の若い時、福助といって満都の子女を悩殺したというその娘形を髣髴とした美人だつたらしい。その上更に、

下町に育ち快活で話はずき、いわゆる箸のころげたのにも笑う

「可愛らしい」女性で、芝居好きの篤次郎との「仲もよく」、峰子にも「真実の娘のようにへだてがなかった」と云う。それで峰子は（久子は篤次郎の死後、奇妙なことをしているにもかかわらず）、

・ 久ちゃんのように美しい人は大がい心持もやさしく可愛らしいものらしい

・ 林（林太郎、鷗外）と仲よくして篤の嫁と二人きれいな人が揃つたら、私はどんなに幸福だろう。

と考えたらしい。そして、於菟は峰子が、

相当の良家の教養ある令嬢の中で美しい人をと懸命にたずね出した。

と記すが、ここでこの文の傍点部分に注目するならどうだろう。

というのも、エリーゼ事件に奔走した小金井良精の妻で、鷗外の妹の喜美子が、「次ぎの兄」⁽²⁵⁾でエリーゼについて、

人の言葉の真偽を知るだけの常識にも欠けている、哀れな女、

と云っているからである。「ちつとも悪気の無さそうな」「美しい人」ではあっても、「踊もするけれど手芸が上手」で、結婚が決まるまで、その手芸で「自活して見る気で」、日本に来たような女、また、

帰って帽子会社の意匠部に勤める約束をして来た⁽²⁶⁾

ような女は、鷗外の「隠し妻」・小玉せきと同じだつたらう。せきは未亡人で、裁縫も上手、「森家の仕立て物を受け」、峰子の目にもかなつた女⁽⁸⁾だつた。「舞姫」に、

すぐれて美なり。

と記される「十六七」の少女・エリスの父親は、「仕立物師」(この場所は確認されている)になっている。「踊りもする」というが、子供心にも、芸者など、「丸で人間とは思つてゐなかつた」(「キタ・セクスアリス」)当時、そんな女は、「路頭の花」⁽²⁵⁾ならともかく、十四代も続く森家のしかも、親達まで「一目譲」⁽²⁶⁾る長男の嫁としては、「陸軍武官結婚条例」以前に、既に不適格だったに違いない。

だが、洋行して帰国した鷗外の知人が、結婚した英国の婦人と共に訪れた時、鷗外の云った言葉に注目してみよう。「丈が低く色も黒」い知人の「風采」を見て、

どうしてあんな美しい人が日本まで来る気になったかと、「不思議がる」家の者に、鷗外は次のように答えている。

なあにあつちの女は男が親切だと思つてどこまでもついてくる。風采などかまわぬよ

と。思春期の林太郎(鷗外)が、自らの容貌に悲観していたことは既に述べた。杏奴も見合いの日に、

お志げさん大變、色が眞黒で鼻の頭がかてか光つてて、まるでお化のような人ですよ

と。知らせた人がいたと記し、⁽⁵⁾鷗外も又『半日』に、

好い男は年を取ると損ねるから、おれのやうな醜男子の方が得だ

と記している。「親切」は「明治文人の表現」で、

現在の「愛情」を表している

と解釈されているが、⁽²⁴⁾『舞姫』の言葉で云い替えれば、「憐憫の情」「真率なる心」になるだろうか。そもそも漱石流に云えば「可愛想とは惚れたということ」だった。エリーゼは、そんな心に応えるように、鷗外を「愛」して来日したのである。

のみならず杏奴は、志げが「たまたま『舞姫』や『文づかひ』を讀」み、鷗外を「好きになつてしまつたらしい」と云い、

舞姫の主人公、太田豊太郎に戀したのであるが、(中略)實在の父を見て少しも其夢を破られなくて済んだ。

と伝えている。⁽⁵⁾志げは峰子の願い通り、美しく家柄もよく、「伶俐なることたしか」な女だった。その「才女の評」⁽⁸⁾にふさわしく、

男、というものはその人格、見識が顔に出なければ立派といえない

との見識をもち、世間一般の「美男子」の噂にも、「あんなのは魚屋か職人ならいい男、といつてもいいけれど立派とはいえないわ。」と云っていたと、於菟は伝えている。そして更に「十歳以上、年長」で、「寛容かつ趣味豊かな父」は、母にとつて「充分あまえられる良人でもあった」ろうとも。「己れの容貌は醜く」「女に愛される資格」はない、と思つていた鷗外にとつて、志げは又とない得がたい女だったに違いない。志げが鷗外を、初恋の情熱で以て、愛したことは既に述べた。

とすれば、わずか三か月にも満たない短期間だが、小倉時代の志げは、ひよつとして鷗外にとつて、エリーゼにも似かような存在だったのではなからうか。「中央より退けられた気味」のある小倉と、「燈火の海（華やかな都会の表通り）を渡り来て」「狭く薄暗き巷」の中、「仕立物師」の家と、そして又、於菟が伝える右の傍点部分の鷗外、それを杏奴の言葉で云い換えると、

學問のみを終生の友としようとしてゐる父

と、志げの境遇、即ち、

女には學問は要らないと云つて小説を読む事も固く禁じられてゐる祖父の家に育ち、縫ひかけの衣類の下に貸本屋から借りて來る小説類をそつと忍ばせて折折見るのを樂しみにしたと云ふ母の生活

は、次に記す『舞姫』のエリスと豊太郎の關係に、十二分に対応するだらう。

彼は幼き時より物読むことを流石に好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジユ」と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識る頃より、余が借しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。か、れば余等二人の間には先ず師弟の交りを生じたるなりき。

と。帰京後のことだが、鷗外は志げの小説を見てやり、添削もしている。於菟は、「父は少なくとも、小倉へ行つてからは」鷗外の号は使わなかつたと云うが、エリーゼへの想いを歌つた「扣鈕」の三連・四連は、都での我が身を無用の者と思ひ、東下りした業平の次の歌、

名にしおはばいざこと問はん都鳥わがおもふ人はありやなしやと

を、何と又髻髷とさせるのだろう。志げが茉莉の名を百合にしたかったのも、都鳥が百合鷗の雅名であることと、関連するのだろうか。

六

だが、鷗外が志げより「十歳以上も年長」だということ、二人の間に、十八年もの年齢の差があるということは、西欧化・近代化を叫んで、疾風怒濤のように突き進んだ明治という時代では特に、並大抵のことではなかったろう。十年一と昔という。

その言葉通り、志げは孝ということを理解しない。私小説風と云われ、啄木など観潮楼に集る者は驚き、志げは単行本化を拒んだと云うから、『半日』の「奥さん」は、ほとんど志げの実像だったのだろう。そのように考えられている。

「奥さん」は「博士」（鷗外がモデル）の「母君」（峰子がモデル）を「あの人」としか云わない。

博士が何故母さまと云はないかと云ふと、此家に来たのは、あなたの妻になりに来たので、あの人の子になりに来たのではないと答へることになつてゐる。

つまり志げは、一人で生まれ一人で生きていると思つている。生まれた家の格で、人生の大半が決まってしまうとは、思いもよらない。江戸時代のまともな人間は、先祖代々伝えられた家を、自ら受け継いだ家より確かなものにして、子孫に渡すために働き、子供の教育もした。儉約を旨とし、株にも詳しくかつた峰子の人生は、まさにその通りだったろう。にもかかわらず、

・お金はみんな持つて行つて、好い加減にしてゐて、あなたをまで取つてしまはうと思つてゐるのですもの。ちよいと油断をすると、すぐあなたの側へ来る。あなたはあれが当前に見えて、ええ。気味が悪い。

・あなたの取つて来る月給なのでせう。あの人、の御亭主は判任官で、なんにもなかつたのだから、あの方はあなたに食べさせて貰ふ丈で、おとなしくしてゐれば好いのだわ。人の物なんぞに手を出して。

などと、自分は何もしてきていないのに、「主婦の権利」として、夫や主婦の座を独占するのが当然とばかり、云いたい放題云い散らす「奥さん」の言葉は、「博士」も云うように、まともな人間（人と人の間に生きる人間）が聞いたなら、「氣違としか思はない」だろう。「奥

さん」のような「女」は、いかにも「博士」の云うように、

あらゆる値踏を踏み代へる（価値観を変更する）今の時代の特有の産物

だったに違いない。それも西洋流の自由平等を履き違えた浅薄な個人主義の。それは例えば「お稽古に行く」とは云っても、「芸術に身を入れる」というのではなく、

日本絵の先生にも通つた。琴の師匠にも通つた。絵を書かうとも、琴を引かうとも思ふのではなかつた。只々お仕舞をして、車に乗つて、紀尾井町（自宅のある場所）と其先生、其師匠のゐる町との間を、毎日往復する。

だけというのが、「所謂お稽古の概念」であるような、「事を初め」ても、「徹底する」ことなど思いも寄らない、気ままで中途半端な、それでいて、性急な当時の新しい女子教育のせいだったろうか。もつとも志げは、峰子同様、「女には學問は要らない」と云われて育っている。だが、大審院判事の娘として「伶俐」に生まれ、『舞姫』や『文づかひ』を隠れて読んだように、新しい時代の流れにも敏感だつたと思われる。

もし志げが鷗外と同じ頃に生まれ育ち、男子と机を並べ、同じように漢籍を学んでいたなら、『孝経』の我が身は親の分身、自分のものなどではないという次の一節

身体髪膚 受_二之父母 不_二敢毀傷 孝之始也

くらは、身につけていただろう。そしてその後にく、

立_レ身 行_レ道 揚_二名於後世 以_レ顯_二父母 孝之終也

と続くことも。つまり、自分の人生も単に自分だけのものではないのだということも。

志げは夫を熱愛し、戦地への手紙も、「親切で微細を尽して」も、「常識的」な峰子と違い、その「哀切の情」は、『うた日記』の素材になる程の素質を見せ、更にその上鷗外が愛してやまない正直で、まっさらな汚れない心の持主だった。にもかかわらず、気違いじみた言葉を吐き、その当然の結果として、誰にも相手にされず、神経をとがらせ、「頼りな」気な風情を見せる、その哀れな姿を見て、鷗外は考える所があつたのだろう。

若い時に夫婦が同じものを見て置かなくては、後に対等な夫婦になり難い。対等になるなぞ出来ないとしても、同じ思い出を持つことが(中略)できない

と訴える珠樹の言葉をこれ幸いと、舅には「事後承諾」という「強引な手段」ととってまで、茉莉を於菟と共に、夫・珠樹の留学先・パリへと、送り出してやるのである。⁽¹⁷⁾ 大正十一年(一九二二)三月、鷗外は六〇歳だった。この年七月に亡くなることを思えば、二度と逢うことはあるまいとの覚悟の上のことだったろう。

にもかかわらず、茉莉は二人の子供を置いてまで、珠樹と離婚してしまう。その理由は、夫・珠樹には鷗外のような詩がないということだった。この傍点部分に注目して、『三田文学』(荷風が主宰)に掲載した『妄想』を見てみよう。発表したのは既に見たように、石本陸軍次官に何度も辞職願いを出す明治四十四年(一九一三、鷗外四十九歳)のことである。

未来の幻影を逐うて、現在の事実を蔑にする自分の心は、まだ元の儘である。人の生涯はもう下り坂になつて行くのに、逐うてゐるのはなんの影やら。

と記す部分は、次のように続いてゆく。

「奈何にして人は己を知ることを得べきか。(中略) 汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の価値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」これは Goethe の詞である。

と。そして更に次のように続く。

①日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事実を蔑にする反対である。自分はどうしてさう云う境地に身を置くことが出来ないだろう。

と。だが鷗外は、軍医の仕事を怠けていた訳でない。於菟が、

父は官史としても忠実な事務家であつたばかりでなく、居常は軍人らしく恐らく宮廷の人としてもふさわしかったらうと思えるほど恭謙であつた。

と云うように、それは鷗外退職の際の、「惜しまれて退く鷗外博士理想的の円満辞職、稀に見る精勤家」と見出しをつけた、『時事新報』⁽¹⁹⁾

の記事⁽²²⁾を見ても明らかだろう。山崎國紀は先ず、そこに記された鷗外の仕事ぶり、「謹厳温厚な精勤家で必要の外は口も開かず笑ひもせず、昼食と局課長会議の外は局長室を一步も出たことがなかった」姿を紹介している。だが、「規定の八時を一分も遅れ」なかった「朝の出勤時間」はともかく、「午後四時の退職時間」には「他の役人と全く」異なり、

省内に振鈴の響きが鳴り出すと同時に後をも見ずにサツ／＼と帰つて行くと云ふ几帳面な遣り方、

とは一体どういうことだろう。この「全く一風異なつて居た」鷗外の姿に、軍医という仕事即ち「日の要求」、「現在の事実」に、鷗外が義務以外のものを、ほとんど感じていなかったと見るのは、僻目だろうか。①に続き、「妄想」の文章は、次のようになってい

日の要求に応じて能事を畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分分は永遠なる不平家である。どうしても自分のぬい答の所に自分がゐるやうである。

と。この部分には、「足ること」を知っている喜助を主人公にし、その姿に感嘆する同心・庄兵衛の姿を記した、『高瀬舟』執筆の鷗外の動機を、知ることができるだろう。と同時に、家の内にも外にも、耐える以外「居場所」のなかつた鷗外自身の姿を見ることも。

しかもそれだけではない。この文章は次のように続いている。

どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出来ないのである。道に迷つてゐるのである。夢を見てゐるのである。夢を見てゐて、青い鳥を夢の中に尋ねてゐるのである。なぜだと問うたところで、それに答へることは出来ない。これは只単純なる事実である。自分の意識の上の事実である。

と。この点線部分こそ、茉莉が鷗外の中に見ていた「詩」だったのではなからうか。のみならず、この点線部分は、やがて小説家になる森茉莉の、その文学の主題だと云つていい。茉莉は鷗外同様、幼い頃とらえ所のないほんやりした子供だったようだが、高齢で授かった初めての女の子だったこともあり、鷗外にまるで恋人のように愛され、茉莉も生涯、一途に鷗外を慕い、幼い頃からその鷗外の最も大切な「意識の上の事実」、即ち「何か素晴らしい」「夢」のような心の真実を、直感的に知っていて、「欧羅巴にあこがれ」「行きたがつて」、やがてそれらを実現してゆく。

同様のことは登志子の遺児で、長男の於菟にも云えるだろう。於菟は明治三十八年（一九〇五）、日露戦争が勃発したのはその前年、鷗外

は明治三十九年に帰国)、鷗外の留守中に中学を卒業、鷗外同様年令不足だったにもかかわらず、於菟を鷗外に近づけたいと願う峰子の意志で、「無理に」受験した「一高の入学試験に失敗」する。のみならず於菟は、「この時私が三部(医科)を受けたのに父は不満であった」と伝えている。鷗外は元來「基礎科学を重んじ、応用科学を好まなかった」らしい。

己れの医学をしたのは家の事情に掣肘されたからなので、なおさら医学がきらいになり、この時も於菟はおれが世話をせぬと思つて、自分で飯を食うつもりで医科に入るのかと腹を立てたのであった。

と伝えている。⁽¹⁹⁾ 於菟は峰子に励まされ、大正二年(一九一三)東京帝大医科大学を最年少者で卒業後、鷗外の意見に従いすぐ理科大学化学科に入り、動物学科に転じて、解剖学者になつてゐる。大学卒業後、「もう一度、他学科をやりたかつた」⁽⁸⁾ 鷗外の夢は、ここに実現したと云えよう。鷗外がその「居場所」として憧れていた「芸術と学問」の世界に、長女と長男が進んだのである。

それにしても、食物改良の議論の中で、

米も魚もひどく消化の良いものだから、日本人の食物は昔の儘がよからう、

と述べ、応用科学より基礎科学を重んじ、

凡ての人為のもの無常の中で、最も大きい未来を有してゐるもの一つは、矢張科学であらう。

とは又、何と高い見識の持主だったのだろう。人と「生まれて学問をしない」のは、「男女を問わず生きてゐる目的がないも同然だ」と云い、⁽²⁷⁾ 学問や芸術に対して、「山の頂を極める人のやうな、きれいな熱情」⁽¹⁷⁾ をもちながら

自然科学で大発明をするとか、科学や芸術で大きい思想、大きい作品を生み出すと云ふ境地に立つたら、自分も現在に満足したのではあるまいか。自分にはそれが出来なかつた。

と『妄想』の中で我が身を顧る鷗外だが、漱石にぶ並び日本文学史上の位置は、やはり鷗外の孜孜と努めた結果以外の、何ものでもないだろう。十三歳で年齢を偽つて、東京医学学校予科に入学して以来、「自分のゐない筈の所に自分があるやうである」と、偽りの人生の中で耐え続け、三年後留学を終えても、「便利の皿を叩つた緒をそつと引く、白い、優しい手」(エリーゼ)があつたにもかかわらず、その「夢」の中の「青い鳥」(それもエリーゼ、そして文学)も捨て、「自分のしなくてはならない」「學術の新しい田地を開墾して行く」

には、「まだ」その「萌芽」さえない国に還つて来た。見捨ててしまったエリーゼ同様恵まれない場所で、子供たちの為に必死で生きる二親や「身近い種々の人」、「兄さん」「く」と慕う「頭の毛のちぢれた」小さな弟の歎きを、兄親である長男として、無にすることはできなかったから。

『妄想』には更に、

故郷は恋しい。美しい、懐かしい夢の国として故郷は恋しい。

と記すが、先祖代々の眠る古里で、「石見人森林太郎トシテ」、自然に死ぬことを願って医者にも診せず、亡くなった鷗外の姿は、まるで「衰へたる哲人の像を見るやうだ」つたと、云われている。⁽⁸⁾「高瀬舟縁起」に、安楽死についての記述が多いのも、幼い頃二親に、侍の家に生れたのだから、切腹といふことが出来なくてはならないと、度々論された鷗外が、

死を怖れもせず、死にあこがれもせず

肉体の安楽というより、心の安楽、心安らかに静かに自然に死ぬことを、願っていたからではなからうか。荷風が最後に見た鷗外の、袴をはき腰のあたりをしかと両手に支へ、搔卷を裾の方にのみかけ、正しく仰臥し、身うごきだもしたまわず、

「半口を開き」「雷の如き鼾を漏したまふ」(「七月九日の記」)、その堂々とした姿は、茉莉が云うように、「もつと極めたくて極められずに死んだ」、「烈しくて、さかんな、そのために寂しかった」鷗外の、

森の中で、たてがみを立てて咆哮する一匹の獅子⁽¹⁷⁾

のような姿にも、重なるだらうか。だが晩年於菟に、

こういう仕事も自然科学の業績をするのとまったく同じだよ。

と云つていたことを思えば、「文学ならぬ文学⁽¹⁹⁾」というより、Literature 移入以前の学問とほとんど同義語だった文学にこそふさわしい歴史小説特に、史伝と呼ばれる世界で数々の名作を遺した鷗外は、幼い頃から一貫して、

・前人の足跡を踏むやうな事はしたくない。

(「キタ・セクスアリス」)

・物を書くというには何でもその人で無ければ書けないというものでなくては価値が無い

(「父親としての森鷗外」)

と思いつけてきたこと的一端を、実現したのではなからうか。史伝の世界は、大学を出た頃、「胸裡に往来した」「夢」のような「理想」(「北条霞亭」)に、最も近いように思われる。

親友の賀古鶴所が、

では安らかに行きたまへ。

と立って部屋を出ると、

御臨終でございます。

と医者が「謹んで申し渡され」、旅立って行った鷗外の姿は、

よく寝釈迦と申しますけれど、まことに気高い、安らかなお顔、其澄んだ静かな心持のあらはれを、珍しく、尊くも拝したのでございました。

と妹の喜美子は伝えている⁽²⁵⁾。遺されたデスマスクも胸像も、限りなく美しい。ライブチヒで誕生したと云われる鷗外の号は、於菟の云うように、小倉以降ほとんど使わなかったとしても、

・地理的に云えば、業平の東下りでよく知られる墨田川の対岸、いわゆる「川向う」(「鷗渡」の外)をさし、

・欧州に在って、その風にそまらぬ男(「欧外」)

の謂であるなら、文学(史)上の鷗外をさす言葉として、最もふさわしいように思われる。

因に、晩年の鷗外は、改めて云うまでもなく、歴史の中の自然に魅かれ、「歴史其儘」の史伝と呼ばれる作品を遺すが、「自分にひどく懐いて」、「故郷を立つとき、まだやつと歩いてゐた、頭の毛のちぢれた弟」・潤三郎が、書誌学者・歴史家になり、鷗外研究にとつての基本的文献・『鷗外森林太郎』を遺していることも、ここに改めて記しておこう。更に又、鷗外がその教育や結婚に熱心にとりくんだ妹・貴美子の孫が、星新一であることも。

- (1) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店) 第一巻
- (2) 『校訂翁草』(五車樓書店)
- (3) 『屍室斷想』(時潮社)
- (4) 『対談 父と娘の深い恋愛』(矢川澄子著『父の娘』たち 森茉莉とアナイス・ニン) 平凡社ライブラリー579) など。
- (5) 『晩年の父』(岩波書店)
- (6) 於菟は(3)の中で、
 其時父は「さう云ふことは、暗黙の裡にやるべきことで、口に出していつては決して醫者としては出来ないことである。又することはできない」と云つて斷然母の乞を斥けて注射を續けさせました。本當の心持は樂に死なしてやり度い氣があつたのでせう。
 と記している。
- (7) 小堀桂一郎著『森鷗外―日本はまだ普請中だ―』(ミネルヴァ日本評伝選)
- (8) 新潮日本文学アルバム1『森鷗外』
- (9) 鷗外は明治二十四年に医学博士に、また明治四十二年には文学博士になっている。
- (10) (8)には
 家督相続人の不始末のかどで八十石の家禄は五十石に減ぜられていた。
 とある。
- (11) 中井義幸『鷗外留学始末』(岩波書店)
- (12) 長谷川泉編解説『作家の自伝2森鷗外』(日本図書センター)
- (13) 松原秀江『本朝二十不孝』論―存在の根拠としての親―(語文第41輯)・「観音利生譚」はちかづき 論―方便力としての「鉢」の意味を中心に―(和泉書院『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』)
- (14) 『鷗外森林太郎』(丸井書店)
- (15) 「棕鳥」には、①おのほりさん、②だましやすしい人の意もある。
- (16) 明治五年林太郎西家人家記念の写真には、大名家の若君に似せたおかつば頭の幼い鷗外が写っている。(11)では、帯から下げた大きな守袋とともに、「故郷に残った母の願いを語っている」と述べている。
- (17) 『父の帽子』(講談社芸文庫)
- (18) 小池正直石黒軍醫監宛推薦状。訓み下し文は(7)による。
- (19) 『父親としての森鷗外』(ちくま文庫)
- (20) 二期生の彼も、三期生の鷗外同様、入学時に年令を多くして入学したという早熟の秀才だった。但し次男。

- (21) 山田弘倫『軍醫としての鷗外先生』(医海時報社)
- (22) 山崎國紀『評伝 森鷗外』(大修館書店)。この書には又、鷗外が華族になれなかったことについて、山田弘倫の『軍医森鷗外』の記述の省略した部分も含め整理して、
四十年九月に小池は「華族に列」(男爵)した。なぜ小池が「華族」になれたかと言えば、「三十七、八年戦役」(日露戦争)で総軍の野戦衛生長官をやり、兼任して満州軍総軍兵站軍医部長に任じられたからである。鷗外が「華族」になれなかったのは、満州総軍の下に位置する四軍の一つ、第二軍の軍医部長にとどまったことであると述べている。
- (23) 山崎國紀編『増補版 森鷗外・母の日記』(三一書房)
- (24) 林尚孝『仮面の人・森鷗外―「エリーゼ来日」三日間の謎』(同時代社)
- (25) 小金井喜美子『森鷗外の系族』(岩波文庫)
- (26) 小金井喜美子『森於菟に』(近代文学作品論集成②『森鷗外「舞姫」作品論集』クレス出版)
- (27) 森類『鷗外の子供たち―あとに残されたものの記録―』(ちくま文庫)
- (28) 塩田良平『森鷗外の人と作品』(『山椒大夫・高瀬舟』ポプラ社)

〈付記〉

本稿は大手前大学での授業がきっかけになりました。熱心に受講してくれた学生の皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございます。尚本稿をなすにあたり、大阪府立中央図書館・神戸市立中央図書館・三宮図書館の司書の方々に、お世話になりました。心より厚くお礼申し上げます。